昭和52年10月5日第1号刊行 ISSN0386-2283 令和6年9月1日発行 第48巻第9号通巻564号

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology
みんぱくは創設50周年を迎えます

月刊みんぱく 9月号 2024

特集 吟遊するヘテロトピアン

巻頭エッセイ 星野 博美

好きな国、嫌いな国

星野博美（ほしの ひろみ）
ノンフィクション作家

先日ある編集者から、「これまで旅行した中でどこが一番好きですか？」と聞かれた。

この質問はよくされるのだが、軽く苛立（いらだ）つ類いのもので、「好きな国も嫌いな国もない」とぶっきらぼうに答えた。「でも香港は好きでしょう？」と彼女は続けた。

確かに、香港には通算三年住んだことがある。好きでなければ、三年も住めない。しかし香港が特段好きというわけではない。

もともと中国文化に関心があった私は、社会主義国家・中国を理解するため、対極に位置する資本主義の植民地・香港へ行った経緯がある。社会主義を「好き」と仮定するなら、正反対の地へ行ったわけだ。では逆に、香港を好きになったら中国が嫌いになるかといえば、そんなことはない。国や文化を好き嫌いで論じることにはまったく意味がない。というより、愚かですらある。

そんなことをやんわりと伝えたが、彼女は諦めず、「じゃあ一番多く訪れた国は？」と食い下がった。

これまた愚かな質問だよな、と思いつつ、この話題を早く終わらせる方法を考えた。文化論ではなく、出入国スタンプの数にすり替えてしまおう！

中国、と答えようとして、逡巡（しゅんじゅん）した。私が月に一度の頻度で香港から中国へ入ったのは、学生ビザが切れて無査証状態になった一九九七年七月一日以降、香港が英国から中国に返還された後のことだ。つまり自分自身は中国外の香港にいるつもりでも、厳密には中国内の特別行政区にいたわけで、その往来は国内移動だった。

何冊か前の、使用済みパスポートを思い浮かべた。一時期、このパスポートの後半を埋め尽くした国がある。そのせいでとうとう頁が足りなくなり、現地の日本領事館へ増補に駆け込んだのだった。

東ドイツである。

ベルリンの壁が崩壊したひと月後の一九八九年一二月、私は西ベルリンに長期滞在し、毎日、東ベルリンへ通った。壁は象徴的には崩壊したけれど、物理的には存在し、まだ西ドイツと東ドイツは別の国家で、国境のパスポート・コントロールは生きていた。東西ドイツ国民は壊れた壁の間を自由に行き来できたが、外国籍の人間はそうはいかなかった。そして頁は東ドイツのスタンプだらけになり、とうとう国境検査官から頁を増やしてくるよう言われたのだった。

私が最も多くのスタンプを入手した国は、いまや現存しない国家だったのか……。

「東ドイツかな」と答えると、彼女は遠い空を見つめるようなうつろな表情になった。だから、この話はこれで終わりなのである。

プロフィール
1966年東京生まれ。2001年に『転がる香港に苔は生えない』（文藝春秋）で大宅壮一ノンフィクション賞、2012年に『コンニャク屋漂流記』（文藝春秋）で読売文学賞「随筆・紀行」賞、2022年に『世界は五反田から始まった』（ゲンロン）で大佛次郎賞受賞。最新作は『馬の惑星』（集英社）。

月刊みんぱく
2024年9月号

表紙
祭りで貫禄十分に歌う老グリオ（コートジボワール アビジャン、2015年、鈴木裕之撮影）

＊本文中、撮影者・提供者を記載していない写真は執筆者の撮影・提供によるものです。
＊本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

1 巻頭エッセイ
好きな国、嫌いな国
星野 博美

特集 吟遊するヘテロトピアン

2 **歌と語りが誘うもうひとつの世界**
川瀬 慈

4 **東西交易がもたらした異種混淆のサウンド**
小西 広大

6 **「あなたはマンデ」とグリオは歌う**
鈴木 裕之

8 **現代に息づく吟遊行者バウルの歌と叡智**
岡田 恵美

10 **瞽女唄と『春琴抄』をつなぐ妙音**
広瀬 浩二郎

12 みんぱく回覧板

14 推しコレ図鑑
ネズミでタコが獲れる!?
小野 林太郎

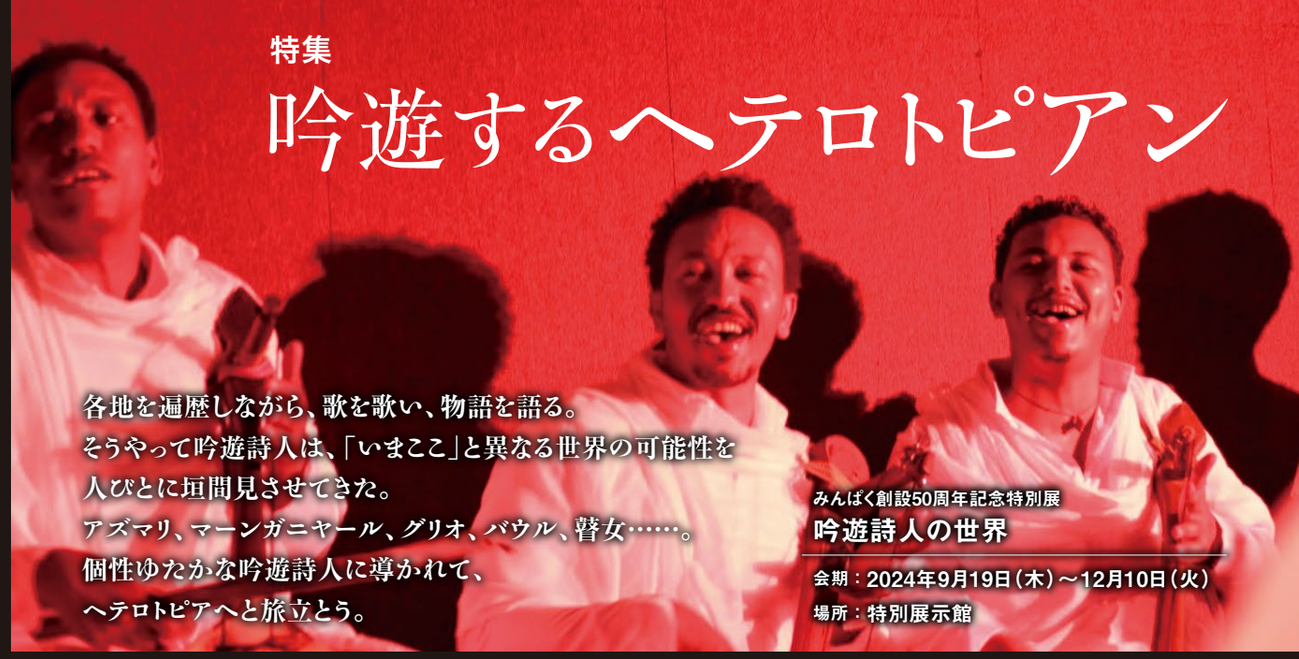
16 ふらりミュージアム
抵抗と解放の国立歴史記憶館
山口 匠

17 世界の「乗っちゃえ！」
廃品回収はバイクを駆って
森田 良成

18 だって調査だもの
肩こり治療に妙技をふるう三人のドゥクンたち
中野 真備

20 ぱくっ！とフィルめし
白米（炭水化物）にヌードル（炭水化物）を添えて
藤井 真一

21 今月号の地図・編集後記



特集

吟遊するヘテロトピアン

各地を遍歴しながら、歌を歌い、物語を語る。
そうやって吟遊詩人は、「いまここ」と異なる世界の可能性を
人びとに垣間見させてきた。
アズマリ、マーンガニヤール、グリオ、バウル、瞽女……。
個性ゆたかな吟遊詩人に導かれて、
ヘテロトピアへと旅立とう。

みんぱく創設50周年記念特別展
吟遊詩人の世界
会期：2024年9月19日（木）～12月10日（火）
場所：特別展示館

歌と語りが誘うもうひとつの世界

川瀬慈　民博 教授

日常を異化する人

各地を広範に移動し、詩歌を歌い語る吟遊詩人は、古くから存在した。一般に吟遊詩人というと、中世ヨーロッパにおいて活躍した宮廷楽師や大道芸人をイメージすることが多い。しかしながら地球の隅々において、吟遊詩人的な歌い手や語り部、芸能者は脈々と生きてきた。

彼ら、彼女たちを、歌や語りをとおして人を楽しませる存在という側面のみから論じるのは短絡的であろう。ミシェル・フーコーの提唱したヘテロトピア heterotopia（現実のなかに見出だす異郷）という概念を借りるならば、吟遊詩人は、詩歌を歌い語る行為をとおして、世界を豊饒に読み替え、異化する存在、すなわち〝ヘテロトピアン〟であるといえる。

神、悪魔、精霊を仲介する人

彼ら、彼女たちは時代の変遷のなかでさまざまな役割を担ってきた。例えば、王侯貴族の系譜や英雄譚を語り継ぐ語り部、戦場で兵士を鼓舞する楽師、為政者を風刺し権力に抗う批評家、宴席に哄笑の渦をまき起こすコメディアン、庶民の意見の代弁者、中央のニュースを地方に伝えるメディア、儀礼の進行を担う司会者、五穀豊穣を祈願する門付芸人。霊的な世界と交流する職能者、世界を席巻するヒップホップ音楽の担い手であるラッパーも、巧みにことばを操り世界を異化する存在として吟遊詩人の範疇に入れて議論することが可能であろう。

吟遊詩人は歌い語り、〝ここ〟とは異なる空間を顕現させ、神、悪魔、精霊などと我々のコミュニケーションを仲介する。凝り固まった社会のシステムを揺さぶり、風穴を開ける。王侯貴族や政治家をはじめとする権力者にうまくとりいったかと思えば、歌のなかで彼らの権威の衣をみるみるはぎとり辱め、社会の構造や秩序をひっくり返す。過去の王朝の栄華を朗々と物語り、我々を過ぎ去った時代に連れて行ったかと思えば、警句に満ちた預言で来るべき未来に誘う。

未来の神話の種子を蒔く人

閉塞した日常を異化する力を持つ吟遊詩人は畏怖の対象とされ、またときには社会の周縁に追いやられてきた。近年は、彼らの芸がポピュラー音楽としてグローバルに消費されるようになり、さらには民族芸能を無形文化遺産として世界的に認定しようとする流れのなかで、パフォーマンスの様式や、自身の表象のありかたを柔軟に変え、したたかに生き延びてきた。

環境破壊、気候変動、パンデミック。地球規模ですぐに取り組まねばならない全人類的な課題が眼前に山積みになっているというのに、出口の見えない愚かな戦争・紛争が時代に暗い影を落とす。グローバルな資本主義の欲望の歯車は日々その回転の速度を増していく。殺伐とした時代に、吟遊詩人が高らかに歌うことはできるだろうか。獰猛な歯車に回収されない神話の種子を蒔くことはできるだろうか。やがて種子が現代というコンクリートの地表を突き破って芽生え、希望を抱けるような明日のビジョンの花を咲かせることを、わたしは夢見ている。

竪琴ヴェゲナを奏でるアレム・アガ氏（2023年）

竪琴ヴェゲナを奏でるダビデ王の絵（2023年、アレム・アガ氏個人蔵）

右頁上：楽師アズマリの集団演奏。アズマリは、エチオピア北部の地域社会の宴席や儀礼において弦楽器マシンコを奏で歌う世襲の吟遊詩人集団である（2015年）（写真はすべてエチオピア アジスアベバにて撮影）

楽師アズマリ、ソロモン・アイヤノー氏と客の詩の掛け合い（2022年）

弦楽器マシンコを弾き語るアズマリ、ソロモン・アイヤノー氏（2022年）

アズマリと聴衆のやりとり
←こちらの二次元コード（QR）から動画をご視聴いただけます。
（2024年12月10日［火］まで期間限定公開）
https://www.youtube.com/watch?v=0iDnXTaYpkk

特集 吟遊するヘテロトピアン

東西交易がもたらした異種混淆のサウンド

小西公大 東京学芸大学 准教授

タール沙漠の楽師集団

インド北西部、パキスタンと国境を接するエリアに広がる荒涼とした沙漠の世界。このタール沙漠に散らばって居住しながら、パトロン世帯や王家に演奏を供し続けてきた楽師集団が存在する。マーンガニヤールとよばれる人びとだ。

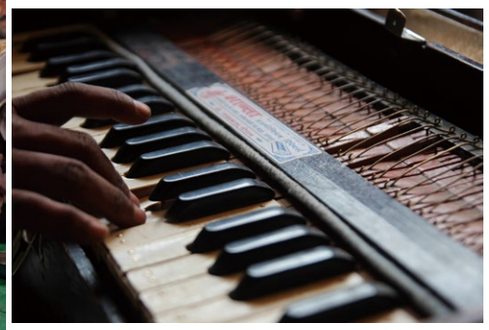
そもそもこのエリアはインドと西方を結び付ける東西交易の要衝の地である。古くは五世紀以降に中央アジアから流れ着いた多様な民族がしのぎを削りあった地であり、一一世紀以降には波のように押し寄せるイスラーム勢力との攻防がヒンドゥー王権とのあいだで繰り広げられた世界でもある。東西から多様な文化がもち込まれてはぶつかり合い、混淆し、蓄積されていったヘテロトピア的な世界である。

ヒンドゥー教徒がパトロンのイスラーム

この地で、古より活躍してきた芸人や楽師、舞踊者のコミュニティの種類は非常に多様で、一説にはその数は数百を超えるともいわれている。なかでもマーンガニヤールは、自らをイスラーム教徒として位置づけつつ、一方でヒンドゥー教の王権や世帯をパトロンとして演奏を供してきた、稀有な存在である。彼らの生業は、沙漠に住む様々な集団に属す世帯を訪れて、人びとが信仰する女神の祭礼や、結婚式などの人生儀礼にて、芸能を通じた重要な儀礼的役割を担うことである。また彼らは、パトロン世帯の系譜保持者でもあり、世帯の代々の祖先名を詠唱し、その偉大さを寿ぐスブラージとよばれる儀礼行為も担っている。ときには、ヒンドゥー女神たちを呪術師に憑依させるための補助的な演奏もおこなったりする。

そもそもこの地はその歴史的背景から、イスラーム教やヒンドゥー教、ジャイナ教など多様な宗教の混淆が文化を彩ってきた。マーンガニヤールのように宗教的錯綜がうかがわれる社会集団もめずらしくない。彼らはその特質を柔軟に利用しながら、生存戦略を練ってきたのである。

右頁：世界的に活躍するアーティストたちは、村では羨望の的（2011年）
（写真はすべてインド ラージャスターンにて撮影）



上：リードオルガンとも呼ばれるハルモニウム。フイゴを手で操りながら、美しいメロディーを奏でる（2012年）

左：マーンガニヤールの老人。ハルモニウムを背負い、パトロンの家々をまわる（2011年）

千年にわたる放浪の源

一方で現代史は、彼らの生業を大きく変動させるほどの試練を与えていた。一九四七年のインド・パキスタン分離独立は、タール沙漠を二つに分割し東西交易路を遮断した。インドのその後の交易は海路を中心として発展したが、この地は急激に凋落の一途を辿った。沙漠の芸能集団たちの多くはその生業を失い、農業労働や小規模な牧畜業へと転身していった。

この状況が一変するのは、八〇年代以降に本格化する急激な観光開発である。彼らはこぞって埃をかぶっていた楽器を手にとり、世界中からやって来るツーリストを相手に演奏をはじめたのである。また九〇年代になり、世界的なロマ（かつてジプシーとよばれていた人びと）のブームが起きると、その千年にわたる放浪の旅の源流という表象を利用して、彼らはグローバルな音楽市場に参入した。二〇〇〇年代に入ってスーフィー音楽（カッワーリーなどイスラーム神秘主義者たちの宗教賛歌）が流行すると、彼らは自らの「イスラーム性」を強調しつつ、スーフィー歌謡をレパートリーに組み込んでいった。あらたな「パトロン」を得た彼らの身のこなしは、世界の急激な変化に柔軟に対応していた。東西交易の歴史が育んできた異種混淆の芸能形態や生存戦略の蓄積が、音楽のグローバル市場の変動に対応できる彼らのしたたかさを生んだともいえよう。

マーンガニヤールたちのアイデンティティともいえる弦楽器、カマーイチャー（2012年）

タール沙漠の芸能――広がるイマージュ
←こちらの二次元コード（QR）から動画をご視聴いただけます。
（2024年12月10日［火］まで期間限定公開）
https://www.youtube.com/watch?v=Pghho4jmqCI

特集 吟遊するヘテロトピアン

「あなたはマンデ」とグリオは歌う

鈴木（すずき） 裕之（ひろゆき） 国士舘大学 教授

「私は誰？」

こんな疑問に答えてくれる人、そばにいるだろうか。

親、先生、友達、占い師……

マンデの民ならこう答えるだろう。

それは「グリオ」であると。

マリ帝国、栄光の歴史

一三世紀に西アフリカに成立したマリ帝国。その系譜を引く人びとをマンデとよぶ。彼らは帝国建国史を「スンジャタ叙事詩」として伝えてきた。

主人公はマンデ国の王子、スンジャタ・ケイタ。敵はソソ国の王、スマオロ・カンテ。

マンデの王を父とし、隣国のソゴロン・コンデ姫を母とするスンジャタが、トゥラマン、ファコリなどの将軍を指揮し、グリオの祖、バラ・ファセケ・クヤテに助けられながら、宿敵スマオロを倒してマリ帝国を打ち建てるまでの知恵と勇気の物語。

この叙事詩を語りと歌で先祖代々伝承してきたのが、マンデの「ジェリ」である。西アフリカ一帯に広がる語りと歌に専門化した職能集団をグリオとよぶが、マンデのジェリはグリオの代表格といえる。

バラ（木琴）、コラ（ハープ・リュート）、ンゴニ（リュート）など特別な楽器を奏でながら、彼らは七〇〇年の長きにわたってマンデの歴史を伝え続けてきた。マリ帝国は三〇〇年ほどして滅亡するが、マンデの民はグリオの声をとおして、自らが誇り高き民の末裔（まつえい）であることを忘れずにいる。

結婚式では着飾ったグリオが誉め歌を歌う（2015年）
（写真はすべてコートジボワール アビジャンにて撮影）

誉めて伸ばす、グリオの歌声

結婚式、子どもの命名式、おめでたいイベント……そんな祭りの日、グリオたちはやって来る。何のために？　あなたを誉めるために、である。

彼らは、ときに太鼓合奏、ときにエレキ・バンド、ときに伝統楽器にあわせて、高らかに歌いあげる。あなたがいかにすばらしい人物であるか、を。

大切なのはあなたの名字。父系性社会であるマンデにおいて子は父方の名字を名のるが、その数は少ない。そしてほとんどの氏族の始祖はスンジャタ叙事詩の登場人物である。

あなたがケイタ姓であれば、聡明（そうめい）で人望厚いスンジャタの子孫。

カンテ姓であれば、スンジャタを苦しめるほどに力強く強烈なスマオロの子孫。

コンデ姓であれば、心優しき（外見は醜かったと伝えられる）スンジャタの母の子孫。

名字をとおしてあなたはマンデの歴史とつながり、グリオは始祖の活躍や美徳といったキャラクター特性を活用しながら、現在のあなたを誉めちぎる。満足したあなたは、グリオに祝儀金を渡す。聴衆の前で、派手に、堂々と札をばらまこう。

ほんとうに始祖と系譜上のつながりがあるのか、ほんとうにその人は誉められるに値する人物なのか、などと問うのは無粋というもの。無文字社会であるマンデにおいては、グリオの声がその歴史を形成してきたのだ。部外者のあなたにどうこう言われる筋合いはない、と彼らは怒ってしまうだろう。

「私は誰？」「あなたはマンデ」と、七〇〇年の長きにわたってグリオは歌い続けてきた。誉めて伸ばす技芸を極限にまで発達させた彼らの歌と、それにこたえる人びとの財力が続く限り、マンデの文化は安泰である。

上：門付けで歌うグリオが福をよぶ（2013年）
下：グリオに祝儀金を渡す花嫁（2015年）

グリオの誉め歌で盛り上がる結婚式
←こちらの二次元コード（QR）から動画をご視聴いただけます。
（2024年12月10日［火］まで期間限定公開）
https://www.youtube.com/watch?v=rr1_seWS_kk

特集 吟遊するヘテロトピアン

現代に息づく吟遊行者バウルの歌と叡智

岡田恵美 民博 准教授

己に宿る魂を

インド・西ベンガル州とバングラデシュに跨るベンガル地方の吟遊行者、バウル。バウルは出自や宗教を問わず、俗世の地位や財産を断ち、自らの意思によってバウルの道へ入門した修行者だ。怒りや執着、嫉妬、欲望、迷いといった感情を抑制するために精神的、身体的修行を続け、己に宿る永遠の魂と一体化することを究極とする。バウルはその内なる魂を、「モネル・マヌシュ」(「心の人」の意)とよぶ。宗教を超越した思想や精神世界をバウルは滔々と歌い、その歌詞には小宇宙である人間の身体と魂、生と死、愛といった主題が巧みなメタファーをとおして綴られ、バウルの叡智が伝承されてきた。

自身の道場で一絃琴エクタラを奏で歌うモッホロム・シャハと信奉者たち(バングラデシュ クシュティア、2023年)

ラロンの歌に惹かれて

バウルの歌は、二〇〇八年にユネスコの無形文化遺産に登録(二〇〇五年宣言)された。なかでもバングラデシュの国民的詩人フォキル・ラロン・シャハ(生年不明〜一八九〇年)やその弟子が伝承してきた歌は、現代のベンガル人に愛されている。ラロンは吟遊行者であると同時に、宗教対立やカーストによる差別を否定し、人間愛を重んじた社会変革者であった。バングラデシュ西部のクシュティアには、ラロンの教えを貫く直系の弟子たちが暮らす。師弟の系譜においてラロンから数えて五代目の一人、モッホロム・シャハ(八〇歳)は、三五歳のときにラロンの残した歌に惹かれて入門したという。一四年間の修行後、師匠から認められてケラフォトとよばれる継承式を迎えた。彼は「ラロンは宗教やカーストに属さず、あらゆる人を受け入れる救いの歌、つまり人間について歌った。だから惹かれるのだ」と語る。現在の修行道場には生まれや宗教もさまざまな信奉者が集う。

モッホロムのような修行者に対し、近年ではその歌唱のみを生業とする芸能者としてのバウル歌手も増えている。首都ダッカで北インド古典声楽を専攻する大学生シャゴル・バウル(二三歳)は、幼少期からバウルの歌に親しみ、現在はライヴやYouTubeで活躍中のバウル歌手だ。「ラロン・シャハはことばを届けるために闘った。ラロンが亡くなってから既に一三四年が過ぎた。僕は二〇二三年のひとりのアーティスト。現代に合わせた形で、ラロンのことばを若者に届けるのが役目だ。古いやり方を続けていたら、いつか誰も聴かなくなる。だから現代のロックとか古典音楽とかをミックスして世間に届けようとしている」と語り、ウクレレを爪弾きながら歌う。

籠のなかの見知らぬ鳥

ラロンの詩に次の一節がある。「籠の中の名も知らぬ鳥/どうやって行き来するのか/つかまえることができたら、心の枷を、その足にはめることができたのに」(外川昌彦訳)。「籠」は身体、「見知らぬ鳥」はモネル・マヌシュを意味し、バウルはこの見知らぬ鳥を掴まえることを究極として修行を続ける。わたしたちは欲望やしがらみのなかで毎日を忙しく生きている。だが、死は例外なく誰にも訪れ、生は儚い。バウルの生き様やその歌に触れると、今この瞬間を生きていること、死後の魂、自身の身体や心の状態を自ずと省みるようになる。バウルの歌が喚起させる掴めそうで掴めないヘテロトピアは、じつは自身に内在するのかもしれない。

都市のバウル歌手シャゴル・バウル(バングラデシュ ダッカ、2023年)

吟遊行者バウルの歌世界
↑こちらの二次元コード(QR)から動画をご視聴いただけます。
(2024年12月10日[火]まで期間限定公開)
https://www.youtube.com/watch?v=aKk91TBzynI

托鉢して人びとを祝福する修行者。米や金銭のお布施を受け、敬われる(バングラデシュ クシュティア、2023年)

特集 吟遊するヘテロトピアン

瞽女唄と『春琴抄』をつなぐ妙音

広瀬浩二郎 民博 教授

音で生きる

視力を失った盲女たちは不自由を強いられる。この世界はマジョリティの論理で成り立っている。盲女たちは視覚の代わりに聴覚・触覚の潜在力を開拓する。どうして生きるのか、自問自答を繰り返す。どうしてとは、手段(how)であり、目的(why)でもある。周囲の雑多な音に耳を澄まし、人びとの声に耳を傾ける。盲女たちは音で物・者の方向を知り、距離を測る。音情報を活用すれば、安全に歩くことができる。歩くとは自立の第一歩。音をとらえ、音を活かす耳が、盲女たちの歩く道を明確に規定する。

音に生きる

音で生きる術を会得した盲女たちは、瞽女となるための修行を重ねる。全身が耳となり、森羅万象の呼吸を捕捉する。宇宙は音であふれている。視覚に依拠する生活を送る健常者たちは、多くの音を聞き逃し、聞き落としてきた。聞こえているのに、聴いていない。不可視の音に身体を委ねる。森羅万象と一体化し、音に包まれて生きる自己を発見する。ここで、目の見えない盲女たちは、目に見えない世界の体現者である瞽女となることができる。瞽女たちは己の声、そして三味線の腕を磨く。音・声は自身の内部と外部をつなぎ、さらにはあの世とこの世、過去と現在を架橋する。瞽女たちが紡ぎ出す唄は、語り手と聴き手の境界を取っ払い、人びとの暮らしを音で満たしていく。耳から体へ。音は瞽女たちの生きる手段のみならず、目的ともなる。

音が生きる

かくして、瞽女文化は継続・発展した。マジョリティとは異なる「行き方＝生き方」を追求する点に、瞽女の独自性、存在意義があった。瞽女そのものが音となり、目に見えない世界の魅力を健常者たちに伝えていたといえるだろう。未来は誰も目で見ることができない。この世に遍在する音を自由かつ柔軟に配列し、未来を読み解く多彩な物語を想像・創造したのが瞽女だった。そんな瞽女たちが二一世紀の日本で消滅した事実は、何を意味するのか。目に見えない世界の価値を忘却した人類の未来は暗い。目に見えない事物は迷信で、可視化こそが社会の進歩である。こういった視覚優位の近代化のトレンドは傲慢で危うい。目に見えないものの代表が人間の心である。瞽女たちは音を介して自他の心象風景を鮮やかに表現した。この心象風景は瞽女唄の響きと震動を通じて、村人たちにも共有された。音が織りなす心の交流の歴史をあらためて掘り起こしてみたい。

音と生きる

谷崎潤一郎は『春琴抄』で盲目になることの喜び、陰翳の美を独特の文体で描いた。いうまでもなく、『春琴抄』は春琴と佐助の単なる純愛物語ではない。以下、印象的なフレーズをいくつか引用する。「佐助は今こそ外界の眼を失った代りに内界の眼が開けた」「めしいの佐助は現実に眼を閉じ永劫不変の観念境へ飛躍したのである」「眼が潰れると眼あきの時に見えなかったいろいろのものが見えてくる」「取り分け自分はお師匠様の三味線の妙音を、失明の後に始めて味到した」「お師匠様も自分も盲目なればこそ眼あきの知らない幸福を味えたのだ」

耳で聴いて理解することを重視した谷崎の文章は、音楽的要素が強い。語り手の谷崎、登場人物である春琴や佐助が混然一体となってストーリー展開する『春琴抄』は、瞽女唄や平曲など、盲人芸能の一人称語り、憑依現象を意識した創作といえる。盲目となることの真意、陰翳美の境地を体感するためには、佐助のように自ら「眼を潰す」のが究極の方法である。しかし、この痛苦をマジョリティに求めるのは難しい。谷崎は小説という形で「内界の眼」「永劫不変の観念境」「眼あきの知らない幸福」があることを幅広い読者に納得させる試みに成功した。

「琵琶を持たない琵琶法師」と自称する僕は、文豪・谷崎の驥尾に付して、「妙音」に裏打ちされる瞽女たちの「行き方＝生き方」を万人が「味到」できる研究に挑戦しよう。瞽女たちの「音で生きる・音に生きる・音が生きる」実像に触れた健常者たちが、視覚偏重の現代文明を脱し、「音と生きる」未来を拓く。そのきっかけとなるような「妙音」豊かな文章を書くのが、表音文字である点字を用いる僕の使命なのかもしれない。

音・風・熱の写真コレクション
瞽女の身体感覚に倣って、ある視覚障害者が「音・熱・風」を意識して撮った写真
(大阪府、2024年6月)

1:太陽を見なくても、熱でその位置がわかる
2:噴水の音が涼しさを運ぶ
3:行き交う車の音で道との距離、方向を推し測る
4:ツバメの鳴き声で巣の場所、状況を知る
5:クチナシの香りが、視線ならぬ指線を引き付ける

1 2 3 4 5

高田瞽女最後の親方・杉本キクイ(右)、弟子のシズ(左)

瞽女宿での演奏

右上:旅姿
右下:門付け

上越市にある「瞽女ミュージアム高田」には、江戸時代から活動を続けてきた高田瞽女に関する貴重な資料が収蔵されている(写真はいずれも1960〜70年代、瞽女ミュージアム高田提供)

みんぱく回覧板

イベントの詳細・予約はこちら

みんぱくホームページ
催し物のご案内
https://www.minpaku.ac.jp/event/

各イベントについて、詳しくはホームページをご覧ください。

みんぱく創設50周年記念特別展

吟遊詩人の世界

各地を広範に移動し、詩歌を歌い語り、世界を異化（いか）する吟遊詩人のパフォーマンスやそれらを成立させる物質文化を紹介します。

会期　9月19日（木）～12月10日（火）
会場　特別展示館

都市のバウル歌手（バングラデシュ、岡田恵美撮影）

■関連イベント
みんぱく映画会

「世界の感触を取り戻せ！――目の見えない者は、目に見えない物を知っている」

映画「瞽女GOZE」を通じて、盲目の女性旅芸人の「触感豊かな生き方」を紹介します。なぜ瞽女は消滅したのか、そもそも瞽女文化とは何なのか。瞽女唄の生演奏に耳を傾けながら、これらの問いに対する答えを参加者とともに探ります。

日時　10月13日（日）13時～16時20分（12時30分開場）
会場　みんぱくインテリジェントホール（講堂）（定員350名）
上映作品　「瞽女GOZE」（2019年）
参加費　要展示観覧券（一般580円、特別展をご覧になる場合は一般880円）
※イベント参加費は不要
演奏　萱森直子（瞽女唄演奏者）
解説　斎藤弘美「瞽女ミュージアム高田」顧問）
司会　広瀬浩二郎（本館 教授）
［副音声解説付き］
本映画は「UD Cast」方式による音声ガイドに対応しています。必要機器は利用者様にてご準備ください。
※事前申込制（本人を含む2名まで）、先着順
※事前申込の方へ、当日12時から本館2階会場前にて展示観覧券を確認後、入場整理券を配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。
解説　川瀬慈（本館 教授）
南真木人（本館 教授）
司会　川瀬慈（本館 教授）
※事前申込制（本人を含む2名まで）、先着順
※事前申込の方へ、当日12時から本館2階会場前にて入場整理券を配布します。
※受付期間中に定員に満たない場合のみ当日参加を受け付けます。

【申込期間】
▼友の会先行受付
9月13日（金）～20日（金）定員6名
お申し込み先
国立民族学博物館友の会（千里文化財団）
▼一般受付
9月24日（火）～10月23日（水）

映画「瞽女GOZE」より

【申込期間】
▼友の会先行受付
9月2日（月）～6日（金）定員70名
お申し込み先
国立民族学博物館友の会（千里文化財団）
▼一般受付
9月9日（月）～10月9日（水）

みんぱく映画会 映像人類学フォーラム

「吟遊詩人をめぐる映像民族誌の視点――エチオピアとネパールの比較から」

映像人類学の主要な実践である映像民族誌の制作。「エチオピアの吟遊詩人」と「ヒマラヤの吟遊詩人」の活動を記録した2本の作品を上映し、それぞれの作品の制作アプローチについて参加者とともに議論します。

日時　10月26日（土）13時～17時（12時30分開場）
会場　本館2階第7セミナー室（定員30名）
上映作品　「アズマリ――声の饗宴」（2023年）、「カトマンドゥのサーランギ奏者たち」（みんぱく映像民族誌第35集、2019年）
参加費　無料（展示をご覧になる場合は展示観覧券が必要）

みんぱく創設50周年記念企画展

客家（はっか）と日本――華僑華人がつむぐ、もうひとつの東アジア関係史

華僑華人の一系統である客家（はっか）と日本の交流の歴史は一世紀半におよびます。本展示は、客家の活動をとおして日本～中国大陸～台湾の関係史を描き出します。

酒場でのアズマリ（エチオピアの吟遊詩人）と客のやりとり（川瀬慈撮影）
「アズマリ――声の饗宴」より

みんぱく創設50周年記念国際シンポジウム

「フォーラム型人類文化アーカイブズ」プロジェクト関連

デジタル人文知が作られるとき

技術とともに知識は変化します。1974年の国立民族学博物館創設から現在にいたるまでを回顧しながら、デジタル人文知とはなにかを議論し、社会における人文学の役割を提案します。

日時　11月17日（日）13時30分
会場　本館2階第4セミナー室（定員30名）
※オンライン（ライブ配信）でもご参加いただけます（定員300名）。
主催　人間文化研究機構 機関拠点型基幹研究（国立民族学博物館）

【申込期間】
日時　9月2日（月）～11月13日（水）
※事前申込制、先着順、参加無料
※詳細は二次元コード（QR）からご確認ください。
お問い合わせ
本館研究協力課　共同利用係
forum_symposium@minpaku.ac.jp

日本統治時代初期の台湾客家（台湾客家文化発展センター提供）

会期　9月5日（木）～12月3日（火）
会場　本館企画展示場

みんぱくミュージアムパートナーズ（MMP）のワークショップ

点字体験ワークショップ

日時　9月14日（土）、10月12日（土）12時～15時30分（最終受付15時）
会場　本館1階エントランスホール
※申込不要、参加無料、当日随時受付

巡回展

ユニバーサル・ミュージアム――さわる！〝触〟の大博覧会 直方巡回展2024

会期　9月16日（月・祝）まで
会場　直方谷尾美術館（福岡）
主催　公益財団法人直方文化青少年協会
共催　国立民族学博物館

驚異と怪異――想像界の生きものたち

会期　9月14日（土）～11月17日（日）
会場　国立アイヌ民族博物館 特別展示室（北海道）
主催　国立アイヌ民族博物館、国立民族学博物館、公益財団法人千里文化財団

みんぱくゼミナール

会場　みんぱくインテリジェントホール（講堂）
参加無料
※事前申込制、先着順（定員320名）
※当日参加申込も可能。当日12時30分より入場整理券を配布します（定員80名）

第549回
9月21日（土）13時30分～15時（13時開場）

世界を異化する歌と語り――エチオピアの吟遊詩人

講師　川瀬慈（本館 教授）

【申込期間】
▶一般受付　9月18日（水）まで
※友の会先行受付は終了しました。

第550回
10月19日（土）13時30分～15時（13時開場）

客家民居と日本

講師　河合洋尚（東京都立大学 准教授）
小林宏至（山口大学 准教授）
奈良雅史（本館 准教授）

客家の伝統的な住まいは、福建省の土楼、広東省の囲龍屋、台湾の三合院など、集合家屋が多いことで知られています。実はこれらの家屋は日本とのかかわりが少なくありません。客家の伝統集合家屋と日本との知られざる関係に迫ります。

福建省永定県にある街中の円形土楼（深遠楼）（2019年、小林宏至撮影）

【申込期間】
▶友の会先行受付
9月13日（金）～20日（金）（定員80名）
お申し込み先
国立民族学博物館友の会（千里文化財団）
▶一般受付　9月24日（火）～10月16日（水）

みんぱくウィークエンド・サロン――研究者と話そう

会場　本館展示場（ナビひろば）
※定員なし（ご自由に参加いただけます）
※申込不要、要展示観覧券（一般580円、イベント参加費は不要）

9月22日（日・祝）14時30分～15時

ソロモン諸島で見殺のお金をつくる

話者　藤井真一（本館 助教）

9月29日（日）14時30分～15時15分

客家料理の世界

話者　河合洋尚（東京都立大学 准教授）
奈良雅史（本館 准教授）

本の紹介

小川聖子、野林厚志 編著
『現代食文化論』
建帛社
2,530円（税込）

食文化論の教科書。ユネスコ無形文化遺産やインバウンド需要から注目を浴びる日本の食。そして日本以外の国々の食事の文化、歴史上のでき事、文化の融合、現代の食の問題点、食に関する地球規模の問題にも触れています。

友の会

講演会・セミナーへのお申し込みは友の会ホームページ内の受付フォームをご利用ください。

お問い合わせ先　国立民族学博物館友の会（公益財団法人千里文化財団）
電話　06-6877-8893（9時～17時、土日祝を除く）　FAX　06-6878-3716
E-mail minpakutomo@senri-f.or.jp　https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

友の会講演会

参加形式①本館第5セミナー室（定員90名）
②オンライン
友の会会員：無料
一般（会場参加のみ）：500円
※事前申込制、先着順
※会員は会場参加の場合、事前申込不要

第552回　9月7日（土）13時30分～15時

台湾客家と日本――20世紀前半を中心に

講師　河合洋尚（東京都立大学 准教授）

1895年に台湾が日本の領土となった後、現地の客家（はっか）社会は大きく変化しました。台湾の客家地域では新たな産業が導入・促進され、人々の移動が加速し、日本風の地名に改称されるなど、その景観は移り変わりをみせていきます。他方で、客家の子弟は日本語教育を受け、日本の技術や文化を学んでいきます。日本へ留学や移住をする客家も増えました。20世紀前半を中心に、台湾客家と日本の知られざるつながりを解説します。

※講演会終了後、講師とともに企画展にて見学会をおこないます。（要会員証もしくは展示観覧券）

第553回　10月5日（土）13時30分～15時

絵語りポトゥアの歌世界

講師　岡田恵美（本館 准教授）

インド・西ベンガル州のノヤ村に暮らすポトゥアは、イスラーム教徒でありながら、ヒンドゥー神話や地母神の物語を自らが描いた巻絵「ポト絵」を使って歌で紡ぎ、その時々の社会問題も絵に取り入れ、巧みに生きてきました。講演では、映像を用いて絵語りを生業としてきたポトゥアの暮らしと歌世界を紹介します。

※講演会終了後、講師とともに特別展にて見学会をおこないます。（要会員証もしくは特別展示観覧券）

推しコレ図鑑

ネズミでタコが獲れる!?

小野 林太郎（おの りんたろう） 民博 教授

このタカラガイは何？

民博の展示には、パッと見では何に使うのか想像できない標本資料が無数にある。そのなかでも最たる品と思えるのが、オセアニア展示にある「タコとり用擬餌」ではなかろうか。タカラガイと石を組み合わせた物体が、木の棒のようなものにロープで縛られ、その先には釣り針のような仕掛けが装着されている。釣り針があることから、これでタコを獲るのだといわれれば、まあそうなんだろうなと理解するしかない。しかし、これでどうやってタコを獲るのかは、まず想像つかないだろう。

そもそもこのタカラガイは何なのか。オセアニアの島民から返ってくるその答えは「ネズミ」。擬餌とあるので、餌なしでもタコを捕獲できる優れものとは想像できるが、餌に見立てているのがネズミとは何たることか。オセアニアでは海中に暮らすタコが、陸生動物たるネズミを食べる習性がある？

答えはもちろんNOである。残念ながら、タコにはそんな習性はない。ではなぜネズミなのか。この疑問に対する島民の説明は、「タコはネズミに対して怒っているから！」

その由来は特にポリネシアに伝わる神話にある。はるかむかし、泳げないネズミはタコを騙（だま）してその上に乗り、島々へ渡ったという。何だかどこかで聞いたことのあるお話だが、『古事記』にある「因幡（いなば）の白兎（しろうさぎ）」と構造はまったく同じ。日本ではウサギとサメ（『古事記』ではワニ）だが、オセアニアではネズミとタコなのである。

タカラガイ製の擬餌でタコを釣り上げる
（サモア マノノ島、2011年、海工房撮影）

漁師は擬餌をゆらりゆらり

なるほど、これで一応の説明はついた。しかし、ネズミに見立てたこの仕掛けで本当にタコが獲れるのか？　答えはもちろんYES。浅いリーフで海にこの擬餌を入れ、上下に動かすとあら不思議、岩場に隠れていたタコが飛びついてくる。漁師はこれを釣り上げるだけで、見事にタコを捕獲する。実際には、タコの習性を利用しているのだろうが、この漁法はオセアニアではかなり古くからあった可能性がある。神話との関連も興味深いが、この漁法を思いついた古代人の知恵には脱帽するしかない。

✦ 推しコレポイント ✦

そういわれるとネズミにしかみえないタカラガイの曲線美！

タコとり用 擬餌
標本番号｜H0007395
地域｜アメリカ合衆国 ハワイ諸島
展示場｜オセアニア展示場

「東南アジア・オセアニア――海辺の暮らしと物質文化データベース」の関連動画「蛸釣り漁」にて、この擬餌によるタコ漁の風景を視聴できる（サモア マノノ島、2011年、海工房撮影）

東南アジア・オセアニア――海辺の暮らしと物質文化データベース
https://ifm.minpaku.ac.jp/maritime/

まどろみのなかの栄光の記憶

抵抗と解放の国立歴史記憶館（モロッコ）

（旧・国立レジスタンスおよび解放軍博物館）

山口 匠（やまぐち たくみ）　東洋大学アジア文化研究所 研究支援者

首都ラバトはアグダル地区の官公庁舎が立ち並ぶ一角に、その建物は高い外壁に囲まれて、ひっそりと立っている。ここを本部とする「旧レジスタンス兵および解放軍兵士高等事務所」という名の機関は、かつて一九三〇年代から一九五六年までの独立闘争に身を賭して闘った人びととその遺族に対する補償と支援をおこなっている。

建物の一般公開部分には、おもに旧フランス保護領域の反植民地運動にかかわる事物が展示されている。二〇一一年に国内の公立博物館を一手に統括するモロッコ博物館財団が設立された後も、この展示施設は移管されず、いつの間にか名称から「博物館」の文字が消されて「歴史記憶館」に変わっていた。それればかりか、近年ではモロッコ各地にこの歴史記憶館の分所が次々と建てられている。筆者は二〇一九年夏におこなった短期調査のおりに、首都の本館を訪れることができた。

個人の訪問はめずらしいようで、館長の男性は、わたしに来館の目的を尋ねてパスポートの提示を要求した後、自ら館内の点灯と換気のために走り回ってくれた。展示スペースは年代に沿って全四階にわけられ、各階の展示は、写真や絵画作品、新聞記事の切り抜きを中心に、ゆるやかにトピックごとの配置がなされていた。セクションごとの解説パネルなどは設けられておらず、個々の展示物に簡素なキャプションが付されるのみなので、控えめに言っても、モロッコの近代史をある程度知っていることが前提となった作りであった。

「独立声明書」（1944年）のモニュメント

独立闘争が激化した時期を扱う三階の展示は、血生臭いフランスの新聞記事や、戦闘で命を落としたシャヒード（殉死者）の肖像が並び、もっとも見応えがあった。しかし、独立闘争を実質的に牽引（けんいん）した政治リーダーたちへの言及は不自然なほどに少なく、彼らの起草した歴史的文書である「独立声明書」が、国王のもとでの独立を望む声のひとつとして並べられるばかりであった。実際に国王の政治的覇権が確立したのは独立後のことにすぎないのだが、かくもあけすけで揚々たる王室中心的なナショナリズムは、埃（ほこり）っぽい展示室のなかで陽気にまどろんでいるように思えた。

上：歴史記憶館と仰々しいゲート
下：亡命していたムハンマド5世の帰国を再現したジオラマ

抵抗と解放の国立歴史記憶館はモロッコの首都ラバトのアグダル地区、ラバトアグダル駅から徒歩約8分のところにある。

廃品回収はバイクを駆って

森田（もりた） 良成（よしなり）
桃山学院大学 准教授

ティモール島西端にあるクパン市は、インドネシア全体でみれば僻地（へきち）の小さな町にすぎない。だが西ティモールからみれば、この町こそが山地の村々と、島の外にある経済や文化の中心都市とをつないでいる。

現金収入を求めて、村人たちは山から町に下りてくる。村には家も畑も食べ物もあるが、「ただお金だけがない」。男たちはプラスチックを編んだ大きな籠をバイクの後ろに取り付けて、金属スクラップなどを買い取りながら町を走り回る。集めた廃品は、鉄、銅、アルミニウムなど素材ごとにわけたうえで、業者にもち込んで換金している。

かつて憧れの存在だったバイクを手に入れることは、今ではそれほど難しくはない。頭金が安くなるプロモーションの時期に新車を購入した者もいるし、フレームがむき出しになった中古車両を使い続けている者もいる。

五年ほど前まで、廃品回収の仕事にはジャワ人の親方に与えられた手押しの荷車が使われていた。この荷車だけでなく、寝起きするための小屋や、仕事の元手となる資金など、町での仕事と生活に必要なほぼすべてを親方に頼っていた。妻や子どもと一緒に町で暮らすことなど考えられる状況ではなかった。

だが、出稼ぎに来る世代が交代して、親方との関係も町での生活も大きく変わった。今では多くの者が家賃の安い部屋を見つけて家族とともに住み、自分で手に入れたバイクを仕事に使う。バイクならば荷車よりもはるかに長い距離を移動できるし、体の疲れ方がまったく違う。集めた廃品をどの業者に売るかも、その日に仕事に出るかどうかさえも自分で決める。町に出てきている親族と集まって夜遅くまで気兼ねなく過ごせるし、遠く離れた村との行き来もしやすくなった。

バイクのローンや家賃の支払いに苦しむことはあるが、金属の買い取り価格は上がっているし、仕事に出ればともかくいくらかのお金が手に入る。「何をするにもお金がかかる」し、厳しい貧困とも隣り合わせかもしれないが、彼らは村に留まり続けるよりもこの町で暮らすことをはるかに好んでいる。今日も彼らは、大きな籠を取り付けたバイクで町のあちこちを走っている。

上：籠を後ろに取り付けたバイク。ホンダ製110ccのカブタイプが多い（2024年）
下：集めた廃品を荷車に積んで運んでいたころ（2005年）
（どちらもインドネシア 西ティモールのクパン市）

だって調査だもの

肩こり治療に妙技をふるう三人のドゥクンたち

中野 真備　東洋大学 特別研究助手

向かいの家のドゥクンによる施術を楽しむ筆者（2018年）

突然だが、わたしは生まれつき首が後弯している。負担がかかると後頭部から背中までが凝りかたまって、ひどいときには二週間近く起き上がることすらできなくなる。

それが運悪くフィールドワーク中になってしまうと、たいへんなことになる。

お父さんが「ゴソッ」

インドネシア東部のバンガイ諸島でサマ（バジャウ）人の漁撈技術や環境認識について調査をしていたときのことだ。用事があってスラバヤ、マカッサルと重い荷物を背負って飛行機を乗り継ぎ、船に揺られ、未舗装の道路を車に揺られ、深夜にようやく家に帰り着いた。

朝起きると痛みで起き上がれなくなっていて、滞在先の父が「ゴソッ」をすることになった。「ゴソッ」はインドネシア語で「擦る、磨く」という意味で、マッサージや指圧のことでもある。父は軟膏を手にとると「ビスミッラー」とアッラーの御名を唱えて指圧をしてくれた。気持ちはいいのだが、経験上ここまでひどいと電気鍼しか効かない。申し訳なく思いながらお礼を言って、しばらく調査を休むことにした。

一人目のドゥクンは、肩に……

一向に良くならない様子のわたしをみて、両親はドゥクンをよぶことにしたらしい。ドゥクンとは病気の治療や祈禱などを専門的におこなう者の総称で、それぞれに培った知識や技術、工夫がある。同じ島にいるという腕のよい女性ドゥクンは、あちこちへ治療によばれているためすぐにはつかまらなかった。

そこでまずよばれて来たのは、向かいの家の七〇歳近い男性ドゥクンである。彼はヤシ油を掬って肩に擦り込み、引っ掻くような仕草で施術をはじめた。背中越しに小声で何かもにょもにょと唱えるのが聞こえたかと思うと、突然ブッ！と肩に温かい水気が散らされた。唾液である。

ところでわたしはこのドゥクンの唾液の入った水を五〇〇ミリリットル飲んだことがある。詳細は割愛するが薬として手に入れたもので、飲み干した後にその材料を聞いて脱力した。ともかく、肩に湿り気を感じながら、（彼の治療の肝はやはり唾液にあったのだ！）と気づいて興奮が抑えきれなかった。写真を見ると顔がニヤついているのがおわかりいただけるだろう。しかしこの日も首もとがスースーしただけで良くはならなかった。

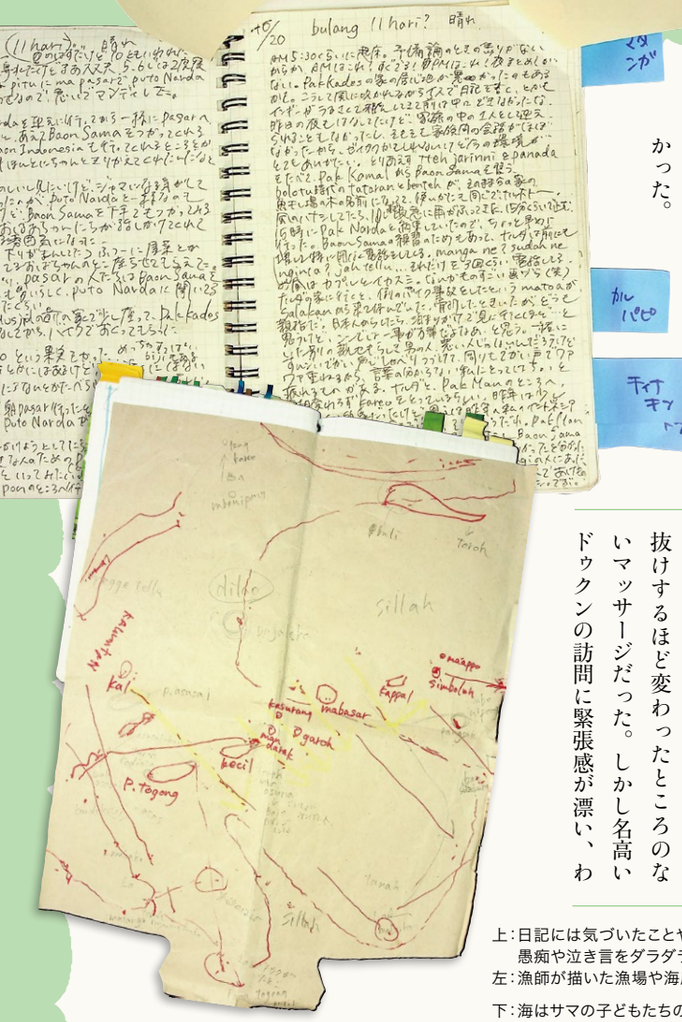
向かいの家のドゥクン特製の飲み薬（2018年）

名ドゥクン、来訪

数日後、次によばれて来たのはマッサージに長けているらしい、近所の六〇歳ほどの女性ドゥクンである。初日の痛みと比べればさすがに和らいできたこともあり、彼女の的確な指圧は気持ちがよかった。

さらに数日して、ついに腕利きの女性ドゥクンが到着した。満を持してあらわれた彼女の治療は、拍子抜けするほど変わったところのないマッサージだった。しかし名高いドゥクンの訪問に緊張感が漂い、わたしも両親も押し黙った。心なしか洗練された動きにも見えてきた。施術が終わり丁重に見送った後、母は「村のドゥクンとは違うわね」とありがたそうに頷いた。

彼女のおかげか時間の経過か、その後すっかり良くなった。健康第一で過ごしてはいるが、体調が悪くなるとつい次はどのドゥクンがよばれるのかと楽しみになってしまうのだった。



上：日記には気づいたことや面白かったことを書くときもあるし、愚痴や泣き言をダラダラ書くこともある
左：漁師が描いた漁場や海底地形を示す地図

下：海はサマの子どもたちの遊び場でもある（2023年）

バンガイのサマ（バジャウ）人の海上集落（2022年）
（写真はすべてインドネシア バンガイ諸島にて撮影）

白飯（炭水化物）に ヌードル（炭水化物）を添えて

藤井 真一　民博 助教

イモ類や魚をココナッツミルクで煮たスープ、すり下ろしたイモ類とココナッツミルクを混ぜて石蒸し焼きにしたプディング。わたしが「フィルめし」について考えるとき、すぐに思いつくものがいくつもある。ただ、ここでは、すでに現地の人びとの暮らしにも欠かせないものになっているとともに、わたしもフィールドでさんざん食べさせられてきた、ある食品を紹介したい。インスタントヌードル（即席めん）である。

わたしのおもな調査地はソロモン諸島の首都であるホニアラとその近郊村落だ。首都での食生活が、もはやイモ類やココナッツといった自給自足的なものではなく、購入食品に大きく依存していることは想像に難くないだろう。しかし、首都からトラックで1、2時間の距離にある近郊村落の食生活も似たようなものである。村で栽培されたイモ類や野菜類はトラックで首都まで運ばれて市場で販売され、そうして手に入れた現金を使って、村人たちは華人商店などでコメやヌードル、魚の缶詰などを買って帰宅する。毎晩の食卓に並ぶのは、ヌードルを載せたてんこ盛りのコメや、アホほど盛られたコメの上に魚の缶詰を載せたものばかりになる。

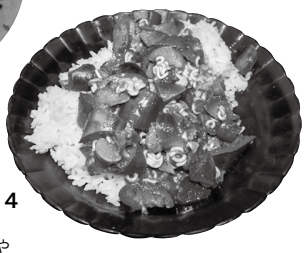
あるときはトロロアオイやナスなどの野菜とともに、あるときは魚の缶詰を混ぜて。2010年から撮り溜めた1,000枚以上の「フィルめし」の写真を見返すと、「ヌードルを白飯にぶっかけたごはん」にもバリエーションがあることに気づかされる。

ソロモン諸島料理の伝統的な味付けといえば塩かココナッツミルクがほとんどである（ごく稀にショウガやカレー粉も使われる）。そんな調味文化のなかで、ヌードルに付いてくる粉末スープは、伝統的な味付けを脱する「近代」の象徴といえるかもしれない。

1

2

3


4

5

6

7

1：トマトと玉ねぎ入りヌードルと、葉野菜や魚の缶詰と煮たヌードルを載せたコメにサツマイモを添えて（2018年）
2：大量のヌードルだけを載せたコメにバナナを添えて（2014年）
3：葉野菜とヌードルを煮てコメにかけたもの（2013年）
4：ナスと一緒に煮込んだヌードル（2011年）
5：玉ねぎと葉野菜、魚の缶詰を混ぜて煮たヌードル（2012年）
6：葉野菜と魚の缶詰を混ぜたヌードル（2019年）
7：たまにはヌードルではなく魚の缶詰だけを載せたごはん（2012年）

1、2、4はガダルカナル州にて、3、5、6、7はホニアラにて撮影

月刊みんぱく 2024年 9月号

第48巻第9号通巻第564号　2024年9月1日発行

編集・発行　人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1
電話 06-6876-2151

発 行 人　山中由里子
編集委員　樫永真佐夫（編集長）　河西瑛里子
黒田賢治　中川理　奈良雅史　松本雄一
制作・協力　公益財団法人 千里文化財団
印　　刷　株式会社 研文社

＊本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係にお願いします。

この雑誌は、環境に配慮した工場で、再生産可能な大豆油由来のインク、FSC®認証材および管理原材料から作られています。また、読みやすくするために、色づかいやレイアウトなどに配慮しています。

ミックス 紙｜責任ある森林管理を支えています FSC® C028818
VEGETABLE OIL INK
GREEN PRINTING JFPI P-B10271

『月刊みんぱく』は国立民族学博物館の広報誌です。

世界の文化とみんぱくの展示、研究者の活動について紹介しています。本誌は定期購読のほか、友の会会員の方には毎月お届けします。

『月刊みんぱく』定期購読

本誌を1年間お届けいたします。年間をとおして、いつからでも始められます。

お問い合わせ

国立民族学博物館友の会

みんぱくの活動を支援し、積極的に活用するためにつくられました。本誌送付のほかにも、各種催しなど、さまざまなサービスがあります。

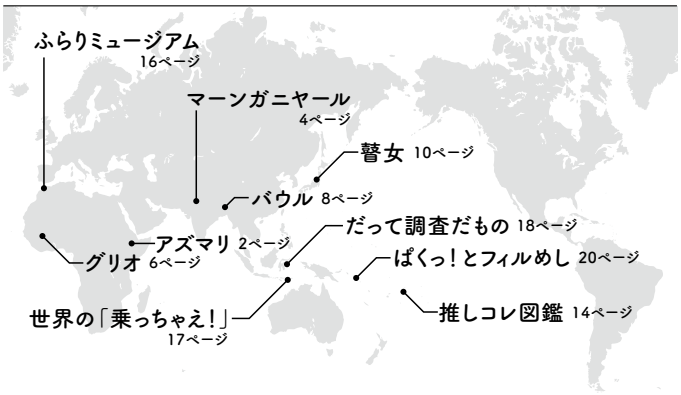
定期購読、友の会については国立民族学博物館友の会（千里文化財団）までお問い合わせください。

電話 06-6877-8893（平日9:00〜17:00）

https://www.senri-f.or.jp/minpaku_associates/

友の会

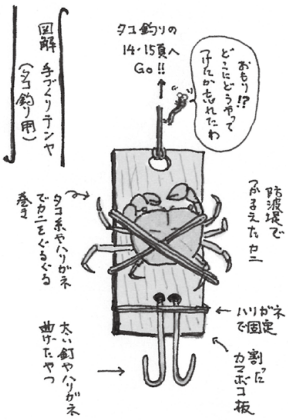
今月号の地図



編集後記

「巻頭エッセイ」の星野博美さんの軽いイラ立ち、すごくわかる。わたしもベトナムに長くいたが、だからといって「ほんとにベトナムが好きなんですね」なんて言われると、「やめてくれ」と思うからだ。たまたま縁があったことは認めるが、好きか嫌いかの一言では片づけられない。ハックルベリーみたいな漂泊に憧れ、でも度胸が足りなくて人類学なとをイッチョマエに口走る流れにのった。

漂泊は吟遊詩人（ああ、なんと情趣あることば！）の属性のひとつである。だが本特集で思い出した。バイクや人でごった返す夕暮れハノイ、病院横のある路地を。盲目の男がアンプ運びの少年を待（はべ）らせ、マイク最大音量でヘタな歌を入院患者たちに無理強いしていた。だれかカネでも握らせて追い払うまで立ち去らない。あれも吟遊詩人！　あの厚かましさ、ずるさ、お手盛りさ……いや、「生」がむき出しなだけ。われわれの胸の奥にも吟遊の魂は巣くっている。特別展にぜひお越しください！（樫永真佐夫）



次号の予告 10月号

特集「アウトドア∞フィールドワーク」（仮）

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1　電話 06-6876-2151

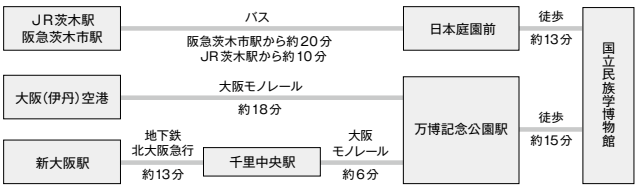
開館時間　10:00〜17:00（入館は16:30まで）

休 館 日　毎週水曜日（水曜日が祝日の場合は直後の平日）
年末年始（12月28日〜1月4日）

観 覧 料　一般 580円／大学生 250円／高校生以下 無料
特別展の観覧料金は、その都度、別に定めます。
※観覧料割引についてはホームページでご確認ください。

主要ターミナルからのアクセス

本館までの交通手段は次の方法が便利です。



みんぱくホームページ
https://www.minpaku.ac.jp/

日本万国博覧会記念公園シンポジウム2024

協働・共創の万博をめざして

2025年大阪・関西万博開幕を半年後にひかえての開催になる本シンポジウムでは、過去3回のシンポジウムの成果が実際の万博にどういかされつつあるのか、万博にかかわる方がたから具体的にご報告いただきます。パネルディスカッションでは、2025年大阪・関西万博のテーマ「いのち輝く未来社会のデザイン」を中心にとりあげ、「共創」、「SDGs」、「コミュニティ」、「教育」、「多文化共生」、「情報化」、「2025レガシー」、万博コンセプト「People's Living Lab（未来社会の実験場）」などをキーワードに、万博のあり方について討論します。

プログラム

挨拶 中牧 弘允 千里文化財団理事長

シンポジウムの開催にあたって「協働・共創の万博をめざして」 吉田 憲司 国立民族学博物館長

事例 1「万博テーマ事業<いのちを高める>（クラゲ館）における共創・協奏の旅路と背後の哲学」 中島 さち子 株式会社steAm代表取締役 大阪・関西万博テーマ事業プロデューサー（シグネチャーパビリオン「いのちの遊び場 クラゲ館」）

事例 2「『いのち』を大切にする社会を目指して――『いのち会議』と『いのち宣言』」 堂目 卓生 大阪大学総長補佐、社会ソリューションイニシアティブ長

事例 3「万博学という視座」 佐野 真由子 京都大学大学院教授

パネルディスカッション

2024年10月26日（土） 13:30―16:30（開場13:00）

会 場 国立民族学博物館 みんぱくインテリジェントホール（講堂）

定 員 350名（要事前申込・先着順） 参加費 無料

申込期間 2024年9月9日（月）～10月18日（金）

■**会場参加**……要事前申込、先着順 ■**オンライン（ライブ配信）**……予約不要（当日、千里文化財団WEBサイトのイベント詳細ページより無料でご視聴いただけます。）

【イベント詳細・受付フォーム】https://www.senri-f.or.jp/expo_symposium2024/

【お問い合わせ】万博記念公園シンポジウム2024事務局（千里文化財団） TEL: 06-6877-8893（土日祝日を除く9:00～17:00）

主催：公益財団法人千里文化財団 共催：大阪府、国立民族学博物館 協力：国立大学法人大阪大学、公益財団法人大阪日本民芸館、大阪モノレール株式会社、公益財団法人 関西・大阪21世紀協会、万博記念公園マネジメント・パートナーズ 後援：公益社団法人2025年日本国際博覧会協会、吹田市、NHK 大阪放送局